東雅

六

AF
JAP
1219
6



東雅巻之九

器用第九

筑後守従五位下源君美撰

犂 カラスキ 倭名抄に唐韻を引て犂はカラスキ墾田器也と注したり式器物に韓鋤と見えしはからすきの事なるへし兼名苑に鳥耕大地を耕す也といへり鍬鋤等の記に見えし所記見えて名を韓鋤と書して注にカラサヒといふ私記に見え古語に鋤 枝名之今の須波之と見て釈日本紀に師の説を引てカラスキ鋤と注せり古の倭に小刀をサヒといひ鋤をもまたサヒといふ彼此名サヒといひしは小刀之をも名ある同じかるへし延喜式に鋤の字





DONS № 3493

備見ゆるかを日本紀まことにかくよりおこれる鍬の形犂鋤に似
よるをいひけるはあるは諸の刀鍬の類に及べり
鋤スキ倭名抄に鋤犂二字共に読てスキといひ釈名を引て鋤去
穢助苗之鍤ハ插地起土之と通せり又神武天皇紀に天
太玉命之孫天富命率手置帆負彦狭知の孫以斎
斧斎鉏始採山材構立正殿と見えしハたとへハ大嘗祭
の斎場を設らるにも斎鉏をもつて始掃地斎斧をもつて
始伐木などいへすれをもつて上古の時鋤といふもの墾田也
用ゐしをおもへハ丸ハ去穢掃地之器なれハその名をスキ

いひしスキとハ素戔烏神出雲須賀地におきまして我心須賀須
賀斯とのたまひしより此地を須賀といふと古事記
日本紀等に見えしにてスカといひスキといふハ語の轉
なりし鉏亦讀てサヒといひし義ハ詳ならず倭名抄に國語を
引く鎛ハ鉏屬也漢語抄にサヒツヱといふと見えたる古に
サヒといひしハ元名鎛のことなれと鎛もまた鉏の屬なれハ
鉏の字亦讀てサヒといひしなるへしサヒノヱといふも其名か
鍬ハコハクハともいふものと見えたれハそのサヒといひしハ小柄の
例と見えたり　鉏属スサヒツヱといふあり椎の属スサイツキといひしも
あり サヒといひサイといふハ元語同し通ずる事を勢

西の用ゐきたるを俗に犂鍬等の字書て讀はスキといふ
いふなり
なり

鍫 クハ倭名抄に犂亦作鐰兼名苑云犂一名鏵讀くハと
いふ說文に钁大鋤也讀を上に同し廣韻に枚鍬屬
也漢語抄にはコスキと讀む字ほしきらず 鑄は鋤屬と見し小
コクハといふは小犂之枚
は犂屬と見しふコスキといふは小鋤之事にしこれ犂といふも大鋤なる
なり然るをおほしていひしと見えたり
クハといふハクとは入事といへりしかしくハは齒之ごとき制歯の
ごとくにして上古の字をいふ也 或人の説にクハといふは鏵の字
をスキと讀ませし倭名抄に轄色立成といふ馬杷はウマクハ
おもと

一川にある處を以て漢流にて編榛須ひす上に曰く編榛ハ
夜?にて洪處把名也といへるを得せり有る紫けく田を治る
是なれハウミツルしといふ也

鈲

カナカキ俗名にして漢流にはといふ鈲をカナカキ一川にしてクヒロといふ
と述せり鉄にてもて牙造るすり爪のごとくあれハカナカキといふ也
クヒロとはクヒリといふ流の物をして似たる[illegible]の俗に揃と枇
出れてクヒルといふ也此今俗にクマデといふもの是也 クマデは俗に熊手の字を
用ゆ 誤?ハ[illegible]に俗名にして方言の四處を[illegible]くして欋といふを
引て欋俗にナラヒといふ此今俗に本朳をサラヒといひ

竹杷を本間サラヒとよむ木葉カキ也といひ又倭名に爬といひてサラヒといふ也方言注に川て杷は應劭が為扒扒は漢語に抄てエフリといふを注せりエブリ義不詳

鎌カマ 倭名抄に機一名は鍥并注にカマといひ桐は鎌柄之カマツカと注せり然にカマとは刈也楊子方言に刈鉤或謂之鎌といへしなとも見えたらず合ひぬかと思えくれ凡柄をツカといふは束也よの柄に而なとをいふ也 倭ツカムとユル

然にいふことなきにも其義なし

連枷カラサホ 倭名抄に陰羽切韻を引く連枷打穀具也注に

カラサラといふて浅せり此器まて韓地より傳し所と見へたり

カラは竿也 竿の訓のごとき仮名抄には皆サラと云り古説に凡物の細きをソといひなりソ亦転してサラともサホとも

いひし

也

已上農器

桑蚕 クハコ 蠶事紀に初帝原中國に傑倉非なりき非月非

ひとつ擘殻されしより桑蚕に化り口まに覃を含ふく

絲を吐けれはしてまた蚕の名わとみへたり桑は木の

名にクハといふは飼葉也蚕を飼ふ葉なるをいふ蚕は倭

名抄に説文を引て蚕は蟲也吐絲俗云アヒキといひ一問に

ニカヒヌいふはなりカヒコといひニカヒヌといふハこれを出す
眠のことくなるをいふ也さて倭名抄に蠶は蚕衣也てニといふを
はなりさとは未也子とはこもの白さといふ也白紙の白と
いふなるへしユの義おの字の語又は也 蠶は秋蟲よりおこるへし
倭名抄には蠶絲異く載せしか彼ここはなるへしね

蚕簿 ユヒラ 倭名抄に兼名苑をひく簿はエヒラ一名笛
蚕器掩於其上令作繭者也と注せりエヒラの義ふ詳

簑 ロク 倭名抄に説文をひく簑収絲者也字亦作䈾とみえて
よろはクといふは文字の音をよみしく

反搏 クルヘキ 倭名抄に辯色立成漢語抄等をひく反搏

讀てクルヘキといふ萬葉集抄にクルヘキ反 糸をよりかくる
物之篗といふものに似て大きなる也と見えたりクルヘキの義
ハ詳 此器をカセワクともいひ又ハヽキともいふなり方言のはしられ
ぬものなれハにや 只今東国の方言にはクルヘキといふ也
糸をクリてへぬるものなれハクルヘキといふにや
古語に凡器具の名をケといひきとおほし

絡垜 タヽリ 倭名抄に揚氏漢語抄を引て絡垜讀てタヽリ
といへり 西海の方言と見えたり これも絡糸
の具也

繰車 シホカ 倭名抄に繰讀てクルといふ絡糸也漢語抄に
繰車讀てシホカといふ 按ずるに繭を煮て絲をとる具也

鼎今東方に倍去十ツ名をいふ之ヲヰカの義ニ洋

鎶

ツムハ倭名抄ニ字書ニ鎶ハ紡車收絲者也字亦作鎶漢
語抄ニツミといふ廣韻ニ紡ハ績也といふをツムクに𨨏鈁
切韻ニ績ハ績麻苧名之といふをウムせと訓せりツムハ
紡の訓く倭にツムといふものこれなり　鎶ハ温器也鎶ハ輠の和字に倭名抄ニ並に
訓くツミといふ也川くれの名ニ洋名ニハ延喜式ニハ鏄
訓くツミとハ鏄を田器也これをまもと柊不成者ハ
毛詩断干ノ篇載弄之瓦の訓ニ瓦ハ紡塼ことみえたる
倍訓ニツムといふことハ御ニ紡ツミといひツムといふ
轄絶取て紡塼ニも紡錘ニも見ゆれハ鼎此也ま倭名
抄ニ紡車の字鎶の字の訓とみえ是れと和名をハ説せれハ
鼎代ニハいつやいむくん鼎を倍に イトヨリクルマとよみしせ
まる　鎶の訓ニ績ハ績麻苧也とみえ績橋倍ニ ヲコケと

いふもの
これ也

巻子ヘソ 倭名抄に楊氏漢語抄に巻子はへそといふ按るに
本文未詳圓巻而綜績麻圓巻名也と記せり纂事紀
日本紀には綜麻の字を読てへそといふ也麻綜をへそとよむの説ぞ
いふ也 麻綜をヘソといひまたヘソトいひしを略語なり

機ハタ 太古の世よりありて織経の事起りぬれど機杼の具并に
織りなすを志りぬべきに同異等詳ならずして文を織なす
あるへけれは名義のこと紀にも未詳機といふ名の見えし
事は書紀に稚日女尊機殿に坐まし天棚機姫神

沐衣を御はたといふは是を婚と云日本紀纂疏
まなはたといふ本説の織女機嫁しやうを端機訓京
過にしをたなはたとは機をはたの名は天はたは
さて萬は用ありへいはまれを繕名抄には機の字を
訓せしおはくは楊氏漢語抄を引ける機はわかはたと
いふをのせし又説文を引て緯を織横絲也又きぬといふ緯
則経可知とのせられ又きぬは貫也経の絲を貫くをいふ也
高の絁はもとは絲にして麻を績しむ今衣裾白羽けと見
又天羽槌雄紡にして文布を織らしむといふ見えし機をハタと
いふは白羽羽槌等の如くなるを以てはたは手ひく和解
とテキテとは手をもて衣とすへき物の所からや

又夕ハ経緯し経の義にもやあらん歟又たて雄といふ
かくるにや夕とはツキといふ絃の物にてはあらん様をハ夕
といふ経緯の字とハ夕といへる義同し
かるへしとは思はれす

杼

ヒ倭名抄に唐説文を引て受緯曰杼字亦作之梭並読て
ヒといへり今按杼ハ杼字也と注す斎宮記日本紀等に

梭

読てカヒといふすりヒといふハ要あらかヒ也凡物の
殻を石城カヒといふ柄読てカヒといふ也梭カヒといふも

箴之倭名抄に梭読てヒといひけれ共斎宮記日本紀に読て
カヒといひしかといふ但凡那詞の上のゆといひしものか
こゝ義をおもふ也の
ほとなるへし

筬

三升義を釋倭名抄に唐韻を引て筬ハ織具也漢語

称すろサヽしふて注せり

縢 チキリ 倭名抄に四声字苑を引く縢を チキリ 織機巻経之木也と注せり チキリといふ義ふ詳

綜 ヘ 倭名抄に玉篇を引く綜は機縷持絲交者也と注
ありへといふ義ふ詳 那今にてもへといひまたはアヤと
アリヒといふ也 されば綜綜くへといひ倭名抄に同じ 三
蒼解に綜は理経也と見えたれば機縷持絲交者に綜の字
日ひくへといひしは さ会りさみて家王の如くへといひし
あまりは経とわけものをわくといひしを見てもへといふて
はヒクともいふ綜の古語也し 見てもろ百采集に延の字綜く
いへといふもいふは糸さといふ へとは引くといふ 又綜くへ
といふもへとは延きをいふにつへとは引くといふなり されて
凡綜を綜するくへといふなりと ち引くの義をおくて中に

わく 機絲を調るを機綜ヘルといひ麻絲を續く巻子をへ
そといひ綜を綜てクルへきといふものあり経を奉くにへなし
こまへクヒともいふものあり高に綴りてへこといふもあり
弋射して繳とねじるへこきといふものあることミハ弓也

跗機クツヒキ

機躡ふみき倭名抄ニ楊氏漢語抄辨色立成ニ引く
跗機をクツヒキといひ又辨色立成ニ機躡躡踏之一
ふみきといふと語ありクツヒキとは足ニてふむをいふ
ふみきとは一經一節ごとにすく抜くことあるをいふ

絡篗クタ倭名抄ニ説文を引く篗絡絲管也漢語抄ニ
クタといふ辨色立成ニ攪車篗子又ハ篗子丸字

用白漢語抄ニ繰車ハヌキカフリといふ説文ニ繰ハ紡
絲於笄也といふを誤せり夕とよひスキカフリといふも成
並不詳 和名史官山路を日本紀ニ久陀牟羅と訓す
きう牟羅ハ據説也夕々も據説しやましし

織機 井ノアヤ 倭名抄ニ孫愐切韻を引て織機は機之巻繒
者也漢語抄ニ井ノアヤといへるハあさやかならず不詳 井ノアヤは伝ニ鹿ニ似まし
猫御へきいふかしくこそ疑
をいへる似たり

已上織絍具

砧 キヌイタ 倭名抄ニ唐韻を引て碪はキヌイタ擣衣石也字亦
作砧擣衣杵はツチ也とはきもキヌイタは衣板也即今いふ

キヌタ也

剪刀 モノタチカタナ 倭名鈔ニ楊氏漢語抄を引て剪刀はモノタチカタナ 所以裁衣囊也と注せり されと モノタチカタナは裁刀也剪刀はハサミといふもの即此也

針 ハリ 倭名鈔ニ陸詞切韻を引て鍼はハリ縫衣具也字亦作針と注せりハリといふ義ハ詳 棘刺をハリといふも是を針よりていひしなるへし

鍇 ヲユヒヌキ 倭名鈔ニ玉篇を引て鍇はヲユヒヌキ 指鍇所以縫衣具也と注せり 即今ユヒヌキといふもの指を覆く

といへり

熨斗ノシ倭名抄ニ蒋魴切熨と同く熨斗はノシ所以熨衣裳也と注せりノシとは展也伸也即今ヒノシといふもの也

已上裁縫具

縄墨スミナワ倭名抄ニ涅槃経を引く縄墨讀スミナワといふと注せり縄はナワ也墨はスミ也これを略して又
なりせしもの用ゆる故は家工の徒にはスミナワといひ所
むかし漢字を借用ひぬるにハ其字を用ゆるは
漢語にあらさるをいひしる也ナワとは合也アフトいひナフといふ

搆流也即ち泡又占合の字読てウラナフといふから紀昂
此之古流又をナワといひアワといふ古搆して云ひ多り 彦萬葉集の
中にも形縄を結ひしことあり物のカクナワといふあり倭名抄
飯餅部又楊氏漢語抄を引て結果So形如縄結出る又有て今
搆和名カクノアハと注せしにも示此
其漢語抄を引て準縄読ていつハカリといふ昂今
俗にミツナワといふ泡ハ水こは称する注せり其漢語抄
を引て墨斗読てスミツボといひ蒋鲂切韻を引て墨
忩読てスミサシといふ也
曲尺マカリカネ倭名抄に雑名を立成を引て曲尺はマカリカネといふ
今と注せり おの天の注は詳ならず

斧ヲノ 舊事紀に天目一箇神斧造りしことみえてそれに
帆負彦狭知命の神大峡小峡の木を伐りて瑞殿
を造られしと見えたり 後代に及びて大家造りし
神又斎部斎斧をもて始て木を伐りてこれ始
なり也倭名鈔にに鐇は廣刃斧也名タツキといふ斧は
ヲノ一名ヨキといふ注ヤタツキとは名は徑也ヨキとも
ヨは檍之 國撰人の歌にはヨクスといふをも日本紀釋に
檍曰也と注せしかめさられ也古語に様にあるものまき
ときといひまたはとといひとといひしをはおの刀の語にて

まり凡材をわるに横さまに截つへきを縦さまに割つるを
も用ゐる所の制同しからねは名もかはるなるへし
すへてはこれをヲノといふヲノとはその大きなるをいひし也
又類聚抄に古く斧をよきといひたるやうは木を破るの
義也と見えたりまた倭名抄征戦具に鉄鉞並読くマサカリ
といひ鉄京俗斧と混してマサカリとよふ義に譯景式鳥沖大蛇を
斬るといひし神の名が蛇之麁正といひしと見えたり故かゝるものをマサ
とかりまといひしなるへしと見えたれとといひかりといふことを
た皆將議あるへし

釿

釿テウノ倭名抄に釋名を引て釿は平ナリ所以平滅斧迹

也とはいへりテニヲハ万葉集に手斧と書るも即此を云の
手といひしは鐇をといひて、をのゝ義なるべし中にあるは
例なり

鐁

カナ　倭名類聚鈔に説文を引て鐁はカナ平木器也釈名に
鉇有高下之跡鐁以此平其上也と云へり辨色立成には
曲刀に字を用ひ類聚万葉集には鐁の字を用ひたり
按鐁字所出未詳とはありカナといふものは大工の具には見て
アナしといひけり万葉集の歌にも鈍といひし即此也一カ
ナは即辨色立成に曲刀と書せしものゝ事なるべし

ねかんな　今俗にやりかなといふもの爰にあれと（ナヽクリといふもの是なり）鐁は鉋の字の誤
かり鉋は玉篇に平木器と注せしもの即今俗にツキ
カナといふ是也

鋸ノホキリ　倭名抄に四聲字苑を引て鐁にノホキリ　似刀
有齒者也と注せり　ノは刀也ホは齒也といふ転れ也キリ
は切也今俗ノコキリといふこれ也（鐁の制大小あり大鋸を俗にヲカともシホカともいふ小き
[illegible]）

鑿ノミ　篆不詳　按倭名抄に玉篇を引て鑿はノミ所以
穿木之器也と注せり（ノは即刀也ミといふ木不詳　或人の説にミモといふメといふ説の非也）

穿るといふは目を開くをいふ也和字の倭名抄に孔竅を目とよ
ノミは穴を穿りあくるれハ刀の目を開くるものゝ源としも
みゆるもまた辨色立成を引く鋑はカフラエリ曲カ鑿
ある也
也とあるはカフラとは鳴鏑也エリは鑿也鈇は徐鉉
利といふ
穴とユルといふ也まへ鑿といひてホルといひ ヨルといふもあり
穴とヨルといふつく時はカフラエリといふは鑿なる
也まゝ小刀の篆の名をさしもあれと篆刺と
いふ又此ハ此也倭名ハンサシといふは即名刺也

鋑
モチ倭名抄は考声切韻を引く鋑は鑽也漢語抄は
モチといふは徐ず利宇の金属物の底をゑるもとモチ
といふものなる鑿

錐
きり倭名抄錐はきりといふきりとは鑽也其はお
の刀𨥤

ほはアム名或説云きりとれ本入也といふ意なりけれ 又倭名抄に元詩を引く錐に
次に鑴とかきし説文に鑴ハ角鋭端可以解結者也と
いふなりといふ説せり若干の神武天皇紀に天手抉と
いふ事見えたれハ此説固より正路に久しき家のことなれ
六祥古説にくさといひしハ入るの詞也と見えたり俗
に手指もしくは物をさし入るゝ抉出すことをくじるといふ也
承ぬりして刀に挿む奇しいふものを漢に鑴といふもの〻目のくしちる也

釘 くぎ倭名抄に陰詞切韻を引く釘ハくぎ鐵代也と
説せり古説にくきといひしハ入せまし凡物の説端あると

キといひけりクギとは又鋲嵩なるに入るをいふ也
また倭名抄に尾頭を引て鑚はキリクギ也蓋針也
漢語抄を引て鉗鏂はノシカタノクギ也見るき大針也と
注せしノレカタの義や洋或説に浮漚丁は倭にツハシカフ
といふものは今の砲孔丁は倭に
へうといふせしといふて也又式に鉅の字読てカスカヒと云
これまた釘屠也万葉集にはカヒといふすを羽のゆさ
あひせしといふにもしくはカスカヒといふ也両木のゆきあひ
とあきまきとやらひぬん此物の漢に馬蝗絆といふもの
あし鎹の字は本朝の俗創造なる所なりといふ也又畜釘
を起きものとクギヌキといふあり漢に手介といふ物の事也

栓

キクギ倭名抄に四聲字苑を引て栓はキクギ木釘也と
注せり今俗にセンといふは字の音をいふ也又俗にクサビ
といふものは八

此せり今俗にセンドいふは字の音を誤る也　又俗にクサビといふもの八

楔也クサビトいふ本邦の詳なりといふは大引鄭玄云古の附
サヒといひしものあり是ハ前をゑるすいつもありし古へ
いれ又俗にチキリといひアリといふものありチキリといふもの八
礼の士喪礼檀弓篇に見えし衽といふものなり鄭氏注に衽八
小要也といひしもの是之両端大にして中小なれハ小要といひ
し也織機之具に経を巻くものチキリといふあり是れ
両端大にして中小さきもの也彼によりて名なやありしむ
まさにそよりて彼名やありしひチキリといふ其の本詳
アリといふもの漢に馬鞍笥といふもの也アリとは蟻也
その穴を穿川といふ也まさに漢にも笥ともいひ直笥ともいふの
をは又ホソといひホソとは果蔬の蒂あるに似たれ
ハ也或説に枘漢にホソといへといふ

椎

以千字亦作槌　古有初學圍椎槌如あり一説には椎
立しきまて圍に椎立まあらしもしられ八をし
字を借用ひられて而するを義とすをしも見て又也

椎訓といふも是これもまた字を借用ひられし而
みてツチといひしハ彼訓といへることなかりし 前の訓のは く詳なり 撃
物具をもひくツチといひしハまなそれ撃しうチといひ
ツチといふは古語の物名也倭名抄に廣雅を引て鎚は
カナツチ鐵椎也と見えたれは字は昂識也篆文を引く
方椎謂之柊椽漢語抄にはサイツチといふまた篆文に以大
椎為椽桙漢語抄にアヒといひてはサイとはちいさきと
いひアヒとはこゝを大といひし也 古語に小をといひくサといひし大をいひくアといひし前はおほ
よみてサイといひヒといふ物語ありて並に何ゆゑか椽桙
なと俗にカケヤといふものにやあらむ

杙 クヒ 倭名抄に杙 讀くクヒといひ今按俗以桟為杙非也と注せ
爾雅注に樴 讀くクヒといわ クヒといふハその土に入るを
いふ也 クの注ホコ又句 ヒといふハ細也

泥鏝 コテ 倭名抄に爾雅を引て鏝謂之杇 字亦作朽 郭璞曰
杇泥鏝也 また玉篇を引て鐵鏝 讀コテ 塗具也と注せり コテ
といふ義詳ならず 俗に泥を和するものを泥をコネるといふ
古よりいひ傳へし俗言なりといひたるなれハ
されハコとは土を和するをいひ テとは
泥を飛して塗るをいふなり

已上工匠具

鞴 フキカハ 倭名抄に漢語抄を引て鞴袋 讀フキカハ也と注

鞴

なり書紀に石凝姥冶工天八湍河の川上の天堅石を採ア
又真名鹿皮を全剥て天の羽鞴となすと見えたれハ古
語にはハフキといひ後にフキカハといひハ吹皮也今俗に
スイカフといふハフキカハといふ詞の略也日本紀に蹈鞴須
をタヽラといふハ鍛冶の方言なりと見えたりしかるに紀に神武の皇后の御名
を媛蹈鞴五十鈴媛命と書されしを日本紀にハ蹈鞴を書され
たりされハ蹈鞴をタヽラといふハ古く上世よりいひなれし
なるをしるへし又中古に此に書されし所にはたゝら
の事を傳ふる所少く右にいふ所ハ比賣多ゝ良伊須
氣余理比賣と書されしその御名を称まうしたれは洋
におろして蹈鞴の義にもあつれと五十鈴の義にもあつれ
伊スけり
なし

鎔 イカタ 倭名抄に漢書注を引て鎔はイカタ謂鑄鉄形也と注せり 今も鎔するとイルといふも漢に蒸鎔といふごとし カタとは模範に倭名抄鍛冶具に鐫はカナツキ 鉗はカナハシ 鐵碪はカナシキ 鋏刀はハサミ 所以切銅鉄也 鏨はタガ子 剪鐵器也 鑢はナラシ 一には削刀といふと注せり タガ子といふ義詳ならず 今も 斷切の義にやあらん ナラシとは平也 日本紀に平を訓てナラシといへり

鑢 ヤスリ 倭名抄に漢語抄を引て鑢子はヤスリ也 錯子は亦ヤスリ也 唐韻に錯は鑢の名 又摩也といふと注しあり

砥は六書故に礪之精者と云へれハとといふは砥精
こまかなることいふは細小之義なるべし スリは多摩也
礪ト倭名抄に並名苑を引く砥一名は礪ト細礪名也磑
一名は磺アラト麁礪石也四声字苑に礪ハ磨鉄石也と
ありて俗名也と記せりトともいふ義ハ鐸右流は従利と トといひ礪
とトといひは鋭利のあるを利りしといふことなくさ名
ありまた磨をトクといふもこのさまは礪とよくいひしから
也とえて
なり

已上鍛冶具

舟舩ハ倭名抄に舟舩の字並読てフネといふ広韻に云陽

此二神御子を生給し始に水蛭子生む此子入葦舩而流し
すてきと見え古事記にありけれは日本紀に天石楠舩
神を生給ふ又は天鳥舩神をもいふ也二書に見えし而亦
日本紀に應神紀に船といふ事見えし始めて舟子あり以前と
起るといふも傳へ崇神天皇の御世ゟ諸國に令して始造
船舶と見えしハ日本紀ニあらはれて舟楫之利普く天下ニ通せし
始と見えたり

舶

ツムノフネ倭名鈔ニ唐韻を引て舶ハ海中大船也楊氏漢
語抄ニツクノフネとも云後世神功皇后紀ニ帆舶の

字を讀てナツムといひ又フムといひ又ツクとよめりこれは
を説概也し石也又足也也ともよめり義は不詳ツリフネといふは中の大舩なりと
そのかみツリといひツキといふ石舩しくいし者也 御詞
栖なりし舟を漕なる不なるとやいひぬめんツムといふもまさ積
載なりをといひし
もたらに

艇

ヲフネ 假名抄ニ廣韻をひく艇小舩也漢統抄ニヲフネ
といふ游艇はをフネといふを以てヲフネは即小舩也
日本紀ニスミノ日舩の字讀てモロキフネといひ又讀て
ハシフネともいひけり漢ニ三格卿艇なといふ所のよめく

舴艋 ツリフネ 假名抄ニ廣韻をひく舴艋はツリフネ小舟

舟也と注せりツリフ子とは釣舟也イサリフ子といふは漁舟
也漁舟をイサリフ子と云 漁火をイサリビといふ東俗の俚言
魚市をイサハとよぶイサハといふは漁場也とおもし
ありける衣のきぬとも見えされとイサリとよぶ
義のことゝハいまた不詳

艜 タカセ 倭名鈔ニ釈名ニ艇小而深者曰艜と挙たれと
艜はタカセなり俗よふ瀬舟の字を用ひて注すなれと
ふ詳 旧事紀ニ猿田彦の鼻背の長七尺餘ありしとあり
えたり今も人の長短 いふ 背のたけさ短きを
いひ人のことゝかきしは凡ものゝ長短を早きも也人もの長き短
さきるを早きなるといふなり也船の迅速なれハ勇まさるもの
なれハタカセフ子と呼ひしを世の人漸舟なとと書なし
ぬるハ倭名鈔をかくも注しけるなり

艜 ヒラタ 倭名鈔ニ釈名ニ艇薄而長者曰艜今按

艜ハヒラタ 俗に平田舟此字を用ひ来る故
またハ洋 俗に凡物の薄きをヒラタしともヒラしとも云
也 業 平をヒラテといひ 礕撲をヒラタモと
いひ一枚一尺等の字をヒトヒラなどいふなどこれも舟の
薄きより名れハヒラタ舟なれはいひしなり

舸

ハヤフ子 倭名抄に漢語抄を引て舸 読てハヤフ子と
いへる語ハ何方にも見えす大己貴の子八重事代主神
此鳥遊をせしを以て熊野諸手船にて使を遣
はされしと見えしを日本紀に見えて船を天鳩船とも
天鴿船ともいひて総説也とり釋に播磨風土記
を川の西の大なる楠ありしを伐りて造れる船

迅きや飛かごとくにして一檝に七浪を越たりしかは
速鳥と名つけしと見えたり 篩舩といふハ速鳥の事にて
迅速之謂也と釈したり古ハ鳥舩篩舩などいひしを
後にハヤフネといひし 疏に浪を 流に船とは水上の鳥をさを
いふ也 然ども又お音出の
此名なり

艨艟 イクサフネ 倭名抄に四聲字苑を引て艨艟ハ戦
船也 漢語抄にイクサフネといふと見えたり イクサとは 万葉
集抄に イハ発語
の詞なり クサとのしるしなりとしるし 軍の時をいふ乃又
戦ある時は陣をなすものをは イクサといふことゝ見えたり

桴筏 イカダ 倭名抄に弁色立成を引く桴編竹木大曰筏

小白桴箋注云イカタといふを注せりイカタは筏字 木竹を大きなるを
いふイカともいへり天武天皇紀にみえし化大人臣紀氏系
図には大人字注云イカタトといふかこときもの也今も
筏は大きなるをイカとしていふ艇小なるをヒラタといふ
よくふこれも竹木を編むて大なるてまつイカタと
いひしもの
乞なれ

倭名抄舟船具にみえし正れ様もこれ小路具舳は
兼名苑注云小船名所謂之舳漢語抄云海路制
水具也へといふ艫は兼名苑注云船後所謂之艫
漢語抄云舟後刺水具也トモといふを注せり日本紀に
舡枻注云フナタヘといふを注せりかまへハこれは船首所を

いひしは見えたれへといひトキといふ義なるも詳ならず或人の説
舳は萬名苑にへと訓く舳は船前頭艫は船後也とす按ずるに
又小爾雅にもまたこれを同じされど増韻揚子方言等にみえて
あるは舳は船後持舵處にて艫は船頭刺櫂處なれハ
小爾雅萬名苑の説同からんこれ日本紀にも舳艫の字読
をトモヘといひ中古後まで見えし亦これも同し古訓みて
されは名義をもかへしといひ今此説のことくに紀あるべき
あるへしともいひまた艫をへとよまんもいふへき船屋
曰舳といふハ揚子方言にみえしを始とし説文増韻の
ともすも亦これを同しき也されは見しぬもと方言には
後曰舳舳制水也と見えしを郭璞が注には今江東呼柁爲
舳と見えてこれハ方言のいふ所のことき船柁ありて船後にあり
柁處といひしは是なれはおもふにこれを船の柁あるすは
うは車の舳あるうしろなるハこれを舳としいひ又正し
ては舳の字とも用ひしと見えしも説文には舳は漢律名
船方長爲舳艫一曰船尾と見えてかく説のことくも方
言のことくは柁をいひて船尾とやすしぬれん亦ゆるし

此末二枚あり
誤テ八ノ巻
略用ノ篇ニ有

西洋阿蘭陀人よりひろく彼方俗を聞てありしに云く
西洋にて舩造り始のさまをしるく説にいふもの
鳥の飛中にありて両翼を展く動きに尾をもて風を
制するを見て造りしことなり也柁はこれ舩尾なりといひき
外国の人に云ふはされと續博物志に視鳶制柁とみえ
またこれを読も会ありて読みて柁をもて舩尾を
うこかしこれを制すへくはなりとみえたり
また文選のことはは豊かに此国よりふるきもの萃読に
久しく鳥名によりて用ひし和もまさなれは郭璞が江
賦舳艫の注に李善は説文をひく舳は舟尾也艫は舩
頭也と注し張説は舳舩首艫舩尾也と注したり
此両説のいつれも或は舳を尾とし舩首とし或は艫を
舩尾とす頃これらの注を見さりしはあり
独り范蔚宗漢書注に據りて舳とへし艫をともとせし
せしは必説ありぬへきを世にこれか論を
見ず方ふ及郭璞が注のことき舳といふものは柁也ありそ
也十といふもの古これを説文の一説に舟尾といふことき
これとも柁をいふに似たり文選の注説の注のことくは

篷はトマ　和名云舟中床所以庇物と注せしはあやまり
舟床也苫はトマ亦非注云編菅茅以覆物也と注せしと
屋を蓋ふものなんどにて舟船に具へしもいへれば大苫
表大苫を留外におほひたれハ上をいふなりの八古よりの字
しありてともゑは舟篷屋はフナヤカタ韻云舟上屋
也と注せしは舟屋也栧はフナタナ玉篇云大船旁板也と注
せり日本紀に船栧はフナタナとよみたりとこそあれ
舩名也旧説はフナヘタといふはあやまりコトヘといへるがごとし棹はカイ
和名云在旁撥水櫂字亦作棹漢語抄にカイといふと注せり

楫櫂等の字注ども亦同じ事也　倭名抄に楫櫂並注て
カチといふハ書分ければカイとはカクもなといふ名義是指南
の暮を三ツカキといふが如く即撥水之義也　舵はカチ曰和名抄
船柁の字注てカチと云、是即是也　舊説には櫂の字を用
ひてカチと注ときはカチといふ義詳ならず　倭名抄に尾類
をのぞく　舵正船木也　揚氏漢語抄に舵は船尾也　或作柁
又さいとも云　是は挟みて毎に呼棹声船師是也と注して然れども
古来より不審なければまた艫は曰尾類所以進船也と注して
目なければ　櫂楫の字注してカコ　チといふよし　未詳

中以石駐舟曰碇字亦作矴並読てイカリといふ蒋鄧切韻
又𦨶ハ浅舟中水之斗也読てユトリといふを誤りてイカリは
万葉集にも此字をよまず只石の字を用ひてイカリと読
めり古語にて碇をばイカといひき日本紀にも読てイカシと
いふことあれはイカリとは様檣をホモリといふがごとく
なるべしカシといふことさへあやまりて牂牁読てカシと云義に牂牁れ(?)は繋
舟をかカシといふは其のあやまりなるべし俗にいはゆる河岸の字を用
いてカシといへり 碇読てイカリし云ふ或読て石とも也
といひ又それよりつねに古語にて石をといひしつゝぬのよ
りイといひしよりいまではあやまりて𦨶読てユトリといひしハ
舟中にたまる水をいふなれ悪(忌)しければ名かへて水避て湯
といひし俗に舟中の水をばアカといふ阿伽とは梵語にて

水をと云　又倭名州舟ヲ取て艘は渡又云船著所ふ
也
所也俗ニ井ルといふてくとえゟ井ルは所也即ち俗ニ又スル
と云ふ是も記と称也廉数と制て艘は数舟向岸也読て
フナヨフヒといふ船は舩不安也読てカヒロクといふと読せり
フナヨツヒといふはツナは舟也といふヒは從袋といふなり
カヒロクといふは飄といふことし曰ふ記て飄の字読て
ヒヽルといふヒロカスといふことき出も撒揚るなるべし

已上舟船

車　クルマ　クルマとは轉廻れる也中ちに齋子記て大己貴神天

羽車大饗に乗りて寛喜しなひしといふ事見えて侍る雖然
國風にはなき大臣家が天日饗羽車に乗りて御禊行幸の
体なかりしかといへるは見えすさては近代よりも車を以
そのくせしけるにや侍る条々大臣家の車かざりの字なしと
日おなじきこれよりはなされ候名のは四望車花を
りさく車かざりの字を好みて牛を入輪轅中也と見えて
あるにして古よりけるに車をなさまかざりても侍れ
後代に及びて車制もまさりすなはち宋元の中に
言葉より事に車を触れ給ふといふ事見えて侍る

制するなり詳なる事は文昌雑録にみえたり亦儀名物車具の車
蓋從の車は蓋形といふ漢語抄の車箱はクルマノトコと
いひ一則の車輿といふ載は車前也クルマノラトシトシといふ轅
はナカエ從の前なるか轅といひ後なるをは鴟尾と
いひ式を小轅といふ軛はクビキ所以挽牛頸也軸はヨコカミ
持輪之也輞はトコシハリ車下索也輪は曰車脚所以進
也輞は車輪郭也漢語抄にオホワといひ一名は輞と
いふ轂は輻所湊也漢語抄にクルマノコシキといふ從は筒
といふ輨は口轄はクサヒ釭は轂口鐵也クルマノアリモといふ

幌幭ハ車帷也俗ニ車ノ簾といふ 鞆ハ車中所坐者クルマノ
トコといふ 榻ハ床也シヂと云 車轍ハ所以制牛後也シリカ
キといふ 鞅ハ軛下津頸纏也 漢語抄ニムナカキといふ 帯袪ハ
牛飾上衣也 俗ニクヒホヒといふ 牛縻ハ 韁也 ハナツラと云
秦ハ牛鼻環也 漢語抄ニウシノハナキといふ 車及ヒ軸轂
輻釭等ハ唯車のこと也 義ニ詳 榻ハ車輿ニ乗ル踏ノ
さるものなれバこゝのしぢといふ 義ハ本ニ詳 榻をしぢと いふは床
几をしぢといへる名を
あはせしに似たり
輦コシ 倭名抄ニ四聲字苑を引て 或作輿 並続テコシと

以て車を輪也とみてよりこゝに此義を得て四方の金に作天宮紀に
曾祀日尓酸嬢の妹竹取嬢ころり轉落より墮死せし
地を墜圓といふ今もし訓といふ字を縦にいふ事
みえ侍るは世にすゝむ輿にいふの字は枕のくゝり輿也
字縦へ多これといふ字も多く多也まで皐ぬる事也
或人の云は輿なりこゝといふのは字といふ
腰輿といふかとこそいへり
輦 テグルマ 傳名称は周礼をみて后居宮中從容所乘但
也輦爲輕輪人挽所以行也今義解云輦所以與
輓 行曰輦也とみてされは古の輦は挽て行なりとみてされ

後に輦といふものこそ、これは輪ありて挽くものにはあれ、此にみえしにはあらず
もまた制れしことありぬらん、詳ならす知られ

已上車輿

鞍 クラ　クラとは座也、古語に座をもクラといひし事は見えて
大己貴神の鞍ありと見えしかは、此物の名も既に古にありけり
すなはち也。倭名抄に俗に尾鞍・移鞍・結鞍・鞍具の名ありと注し
たり。後代に及ひては見えしものあり、其名は多くなれり。又倭
名抄に鞍具類に鞍橋といふは鞍尾、揚氏漢語抄に
クラホ子といふ事も見えたり。クラホ子といひしは古には鞍といひしは

總名也と云ときは上にて鞦韆ありおして鞦韆あり鞦
楾鞦尾なと他ハ猶の昔流ありてとくすれハかくなつ率ま
尻をさす田面紀なは鞦楾総くクラことゝいひ又鞦面緩楾
ともし鞦尾緩楾ともきこえたれとも又は楾かけは鞦楾といふ
ものハ古流ニワケシオとゝいひ大に伝てワヤトワともいふものあて
鞦尾とは俗にイキともユキともいふものあり總へとはこれを
クラホネといふとされハ鞦尾緩楾れ字総くクラホネノミツクク
ホネとはいひし四緒にニキといへしイキとはいふへしなといふ
もし或人の説にユキとは鞍ろうといふ也
古流にては礼本にてあらはしてイキともいひあり鞦をアラキといふもの
その家あらんには鞦尾を乘本しいはしめしあり一ト二三あるかなるを

又これをユキとよめるは假名の家にみえたる假名なり鞦
或人の説のことくこれ様とまうし
揚は揚氏漢語抄にウラヒとよみ假名はウハヒとよむ也 古説未決
九条家同 鞢脊はナヌ蒋務切韻云鞦下鞢脊也假名ヤシともいふ
ナメ者滑也 鞶はシタフラ尻韻云鞦鞶也鞶は鞶之短也
ともいふ 抑まちは鞶は俗にいふ鞍鞍也假名切みとよむの これシタフラとよむ
下鞦也 鞍鞶は 鞦はシホテ考鞶切韻云穿鞦轄也
洋みと候 切韻の鞶は鞍に鞦轄といふなり ミツワとよむは
滑ふり ロツワといふもおなしこと 假字也
古説は四方出とさすなり 源平盛衰記に 鞦色は四分赤
出一萬あるといふことまて 鞦紀は揚氏漢語抄にシリカイ

オヒといふて誤れり

鞦 シタカキ 俗にシリカイムナカイといふ尻と胸とに分る字也

用ゆるもの也シカキといひカイといひ或ハカケといふ共

訛也

腹帯 ハラオヒ 俗にハルヒといふ馬の帯也倭名抄に周禮注と

いふ鞶はウハハラオヒてふ大帯也と注せり

鐙 アフミ 倭名抄に蒋魴切韻といふ鞍両辺承脚者也と注

せりアフミとはアしふミ也フミとは踏也足の踏といふ心

なりといふ又倭名抄に揚氏漢語抄といふ鐙靻付といフ

逆鞦はチカラカハといふてはやりたる鞦は今の制のことくなれ
あられ並鞦古来半舌なといふ事も制も皆異なれハこ
ソヲチカラカハの制も今の物とは同しからねはソヲ也義に従ふへ
カラカハは俗にカ革とよはれしもの也　古鞦の形今も世にのこれる
あるにそれをみよ
とりまき鞦にミツテといふあり總てミツツキと云あり並にこれの
ミツとはいふ義に従ふへし俗にハ乳鞍をミツメといひメトまう
物しくミツと云ありけるをハリノミツと云ふことこれにあり
ミツラといふもの八瓔に古あることのくらの瓔乳をミツといひ
古成尾といふに似たりとミツツキと
いふへき也とくのとくありとこそ

障泥　アフリ　倭名抄に唐韻云韉は障泥鞍飾也と注
せりアフリと云義は障 足の踏む所のものをアフミといふ
あふく足の踏む所のものなれ

鑣 ヌアワリと云 くつわ

クツハミ俗名御ノ説文ニ曰ク鑣ハ馬ノ銜ニ俗ニクツハミト云

馬銜也兼名苑ニ一名ハ勒ト云ト謂ヨリ秋名ニ接

等ノ鑣ハ今俗ニクツハカミト云也銜ハクツハサミト云結

ヘナニ取ル故名ハナト云ハ馬ナリ勒也キ辭也立成ニ原

鞚一ツ以テ七十ト云ハミツキ俗ニミツキト云ト謂ナリ又ハ

正今俗ニクツハツ川ニ勉ヨリ云ト云也揚氏漢語

抄ニ韁鞚一ツ又云鞚ト云ヲクツハウラ俗ニクツハト

云 轡(唐) 説文ニ曰ク亦同シト謂ヘシハ正今俗ニタツナト

てよ縦しあるゝものこれ也今縦をクワンといふなるはこの古
はクワンといひ古縦をクワンといふなるものを今はタツナと
いふこれ古へ乃云の同しからぬ也古はクワンといひしは
馭又合也と云也又ことは多衛也ミツキこツキ等ハ象
洋ゐてハクワハツラといひしをクワンは口綸也凡縦は廻轉れ点
を綸といふならず葉は四橋れる並は絲くワといふ
これをソウは聯也なるの馬又聯絡すといひし今縦よ縦の名意を
ミツキといふをハツハミノミツキは若くてなればこれ綰もまさかく
いひしに或人の説に儀名物に義雄一门に七十といへるより附
な良太タスケとも又手きこゐとしいふものを古くこツヽき
といひしせといひてあるへしれなの馬の鉾に今のタスケ

かしらにとくなりとのえおしは古画の鞦ころと絵りとさしとの
と俗え有りへし深義ある紐の門の論こりしはりつハ
しつきもくニヤウをあわまぜられしと云すむす絵くとも
見えまり次の上総よゆるをいふその門論を招くへし
ともおもしみえ

羈

羈頭ヲモツラ 俗名は面繋にて羈は羈頭之羅はる
絡頭也と云 又物書には絡頭羈頭也と記せり
ヲモツラとはヲモは面也ツラは聯也ほる聯絡を
といひし也今俗にヲモカイといひて面をとさるはその訛
俗名は子轡る具類には古より尾鍬飾又あり
杏葉 鞦 雲珠 金鍍樓 額尾 轡のことききこれ古

畫の尾鞦移鞦等を至しるれ當然ふしふ餝物を
當てし世ては大やうは杏葉ふは鞦當胸等れ
餝之辨あさぬをりくイニラといふ俗にキヤウエウと
いふを誤せりイヒラれ茶洋音れキヤウエウは杏葉れ
字れ音成とくはひし之鞦は尾鞦也鞦稍也楊氏
漢語抄をりくカシヒツケと云と誤せり餝物ハ
子とふすせりものこれ之集韻之構の又鞦は鞦
ヘ追筆或作鞦とえてうさうて鞦鞴中とされ同
鹿子字書にて言帖よあられ志らふ俗名物は鞦縄く

シホテといふ韘懸くカレヒツテと云ことを記に従あり
へり取と云は今も猶鞢懸古来のシホテにて挿付抓付
みといふ名あるは古くカヒツケと云し名の遺りぬるなるべし
中雲珠は鞍具にてウスと云と掛るゝ雲珠
は雲母也一名也爲る飾未詳と語せりウスといふは雲
珠の字也當此からく呼めしあらく鞦上の飾之金鍍は蔡
邕か獨斷にある冠也高廣各五寸上如三華形者也と
いふを按するに今は鞦面の菖蒲形といふ是一也とし
ててけれは此上の飾也菖蒲をふたつとくなるとめく

かしいさらぬをハ俗にはつくしひし楼欹は餅を盛
をいく語くスカヽキといふ語ありスカとハ古語に窓を
いふかきとは是く民俗に服両といふもの尾韜は古
智切韜に作は不い韜馬尾に俗に尾袋といふと記せり
られたる尾を屠尾といふ之の俗に称は肩のかたに納
也此綱 檮梧 萬禄等れも此とくに皆に出き有ら
彼るれは秋まうとも及きん

已上鞍具

麁又り候名所行縢具並ニ行縢具の絵文を引く麁行

篋子楊氏漢語抄に篋子スリと云を訓せりスリと
いふ語のこゝろはしれさる所なり箔は出風土記箔
隔南山之間山有峻棧坂往來之人不得蘇蘿盡
土人曰蘇蘿盡之坂とみえたり今も此俗具にいふ箔
又アフミスリといふものあり 俗にはアフスリといふ又此類を足搔麁と訓せり也
コリといふものあり韓地の方言なるにや今も然雛
俗コリといひし樺桃は家ありしかのもの也
箆ハタコ倭名抄に唐韻を引て箆飼馬籠也漢語抄云
ハタコといふ俗用旅籠字と註せり此語抄今もあり

しもは旅の肉例ゑゝとて給ありかしと見えたりハクニ
といふ此義は不詳

檁子カミヒケ倭名抄ニ蒋魴切韻を引て檁子中有障之
器之漢語抄にカミヒケといふ今按俗に謂破子也破子
はワリコとも讀むと註せりカミヒケは粮也ケは笥也ワリ
コは中有障之器之今もワリコといふものゝあり
を割ておし

蓑

ミノ衰衣鳴非風雨と云蓑笠蓑衣なりしといふ事
見えたるといふものゝ也此名は古の時より出来るも家
も國字以倭名抄には須交を引て雨衣也と註せり

笠　カサ

簦　シホカサ　倭名抄ニ毛詩注史記音義を引て笠所以禦雨也簦笠有柄也俗ニ大笠といふ經也カサ

此簦ハ洋ハ系して柄ありてまはるは今ハカラカサといふ

いつれのころよりこの制ありとしれハ志れ　古書ニ蘭笠の（ことくふして大かさ）

その柄あるを絹かさとみえたり　このきぬかさのみの大かさし

いひしもの制なるへし不詳

已上旅裝

網　カミ　倭名抄ニ纂要を引く獣網曰罘麋網曰罠兔

網曰罝並結ひアミといふ廣雅ニ罟漁網也注ニ

亦同し尓雅ニ鳥罟謂之羅鳥羅注くトリアミといふ
と注しさら万葉集ニは鳥罔注くトアミといひける
また纚は文選注と引て纚網如其飛廣莽者也
師説ニサテといふを注しけりサテといふ也テといふは
も也万葉集抄ニサテとはちいさき網をもちて魚をとると
いへし網は手にて抄くるものといふ臣勢アミといふ義也と紀に
不詳古事記ニ似る所和那良之水門ニ京に天皇此御世山
魚之大鵜鶿を浜網にかけしさま水門を和那良之水門といふ
みてさけるさまハ浜網といふハワナといひし或人の注くアミとは編也といへり

縄は今ひめをナワともいへる縄は編むといふことといへり
もしくはこれ網とあみし古より此ことスクとこれいふなるを
万葉集の網造をスクといひスクとはツクといふ詞なりと
又同類すくれたり見てこう 沖武天皇の御宇庚
此邑の土蜘蛛を葛網を結て掩殺之よりて改てこう
も邑を葛城といへしもカツラツキの誤也と見てこう
網とアミといふ編むの義なりしかとおもはれ又古
手紀に法網説くりナミといへしは説文に罟は網也といふ
義に合ひぬるや義に出して一世ゆ々は網ツナといひ気間を結ふ
とはアミといひしと見てうきるもアミとは気間の細かく
あるべき気はなけれは太といふことにて古語に太をはアミといひ
けることといひそといふは性訛く

蹄

ワナ俗名なりは用ゆるを以て蹄は源語にワナといふと訓す
蘇東坡の詩に火打ちの川獺の蹄にあかりしを解きて放つよし
あれて蹄とワナをよむ関院羅氏説に置其所食之

物ハ縮中鳥来下則橋其脚とえて縮ることワナといふ事
こゝ会ひぬワトといふ事は詳ならす又倭名抄に篠は
四声字苑云罠跋械也漢語抄にはワナ七十也といふ相は反
新に射鼠計也漢語抄に十五としいふ又漢語抄に鼠弩
又云一則は鼠弓といふを縫やう並にきこえ不詳多欲
はワナといふあり魚籠をもまたヤナといふあり射鼠弓をもまたヤナ
ことにいふなどいひし委しく詳漢和にては掩穽を坑とすといふ
ことありさればこそしてヤナといひしもまたワナといふ事もあり
らんワナヤナ並にこれアトの機械にてワナといひやといふは其の川
つらアミといふ事を帯く掩おかれ籠もまた魚簗一つの筬を編わたるを
中を空しくる籠の入ることをとるをはワナといひ水を堰くをて
開き空しく魚籠の落下ることをとるをはヤナといひしに似たり
然又罾を編也とえてさる彼れしといひては梅といひぬ

をまつ

花といはくはやといふことは上世より此
にくわかなり

囮

テンレ 倭名抄に鹿をとる囮網の者也 漢語抄にテン
とし文 文選にも吉紙子至長押人紙抔の野飛者縄
之妹 師説はおとりといふ語也と注せり 并に字彙に テンレとは
鳥の媒せしむ似より日本紀にも此の字を注して ヲトリといふ ヲトリ
といふは拵りの義なるを似より字も借て拵りといひしなり
なしといふ
あるなり

黐

モチ 倭名抄に鹿を捕るとりもち黐はモチ以黐取也 按は
ハカ不以捕る也と注せり 今世の俗に也の黐すなとモチと
いふなりハカハ鳥 字彙 漢に黏竿といふ 今の俗はこの
俗にテレサテしといふ也

鞆クルリ俵名物ま矢数をつくる鞆はクルリ射る矢の名也と見
又云クルリの義ニ詳まし弾弓は儀ニ云ドキウしいふ放
丸弓也と注せられハ行法ありて丸をきれとの射方擬之
ま弋射説ニ十つルといひしは弋名にかすをいふ也弋或説
イヌルミといふ也射禽説にマフシといふ地雑を隠射るを云
並義ニ詳池射説ニムモノイルといひしは古儀追物射
といひしなる照射説にトモシといひしは火を照らして鹿を
射るをいふ也　又タシきうと字の音をよひし　イクルとは弋射具
て　繳といふあり　繳は矢の糸也　繳は生絲縄也

こも澂と見えけれなるを加て澂を切りては餘といふあり
餘とはさきといふくるの射ての魚捕らしくられハイワル
といひしえてくるまゝイワルことといふは字は傍に縹緲といひ
ヌルムといふあり澂をもく説なるかなるをいひし也
魚梁ヤナ　神武天皇巻紀に詩又郭の注梁石魚之道
あひる蕎の古事日本紀に見えてより倭名抄には毛詩注
をりて魚梁注してヤナといひまし廣韻に籍度魚笱と注
りて漢語抄にヤナスといふと注ありヤナの名に洋語の注を併スヘし
又倭名抄に玉篇を引て筌は捕魚竹笱也笱は取魚
竹器也と注ありて万葉集抄にウヘとは竹にて編みたる器
とはひろく末をせばすへく山川に澂くふせ置てうへ魚をとる

とは水を絶て水上の中より水を流して魚此流へ入るをとるなり

又ふしつけ是也和名抄に爾雅注を引て罧亦作橬

フシツケと訓す郭璞曰積柴於水中魚得寒入其裏因

圍捕取之と注してふしつけとは柴漬也柴漬は古き也古き紀に紀 ふしとは柴漬をふしと云を

漬しふし臥しツケとは漬也これを水中よりするをいふ又和名抄に

纂要を引て篧以竹掩捕取因以取魚とあり漢語抄に比々と

といふ今ひゝといふは竹を立て稍有て菱角のごとくあると

いふ也稍漬くひゝといふことも紀も此義なるへし

釣 ツリ 和名抄に説文を引て釣 ツリ 以鉤鉺取魚也と

注せり八重事代主神出雲國三穂之碕にありて釣魚をもて楽
事とし給へれハ釣魚ハ甚上古より浚す事なる也けり
とは鉤を遮ゑ然るへし鉤とは上古の俗はちといひ
今日本紀に出ては古語を見合せて考へれし
は鉤ハ天といふも又よりにつくし物とハサといひしか
これを桃説ハ波利都利曲鉤といふ所也　數殺如　字彙篆
鉤をハリといふ事ハ又此字也倭名抄ニ漢語抄
をウケといふ事も梅毛ニ網具にして此名とかへり
子は釣具也網具にウケといふものは四手網縄と云

栯字をいふことなくてよろし篠字をウケとは分別也
倭名抄畋獵具類に度手あるをはこゝに録せり
鷹犬具の庭類をいふ䋺は爾雅註摘也今按一字者
訓義ともなきにはアシヲといひ犬にあるはキツナといふ
と語よりアシヲとは鷹の足に縄つといふ也又今一ツ
といふものありて條緒をもてあはするを太緒
とも見えたりキツナは韋綱也文選緒をいて條者
韋也キツナを縒ふ犬枷はクビツナといふ也語は
ヒツナとは犬の頸に紫めるをいふ也文漢語抄をいて

梯子緩くモトナリといふを解せり是は義異也万葉集にも
回の字緩くモトホルといふことさらにいはこそものゝ旋
將是緩といふ也講緩くメカ多武といひ文選緩く辟衣
せといふを周易の字書にもみえて異なる古画
て回地を緩くさしたる事にてもといふをみるべし
室を剝かくをなれば緩くメカノエカケといふものはし
物の字訓なきまゝ錦は玉篇といはく大也せりけり
といふを緩せられば大異なり様の字まして剃異にてカナ
ツカリといふを緩せらばツカリといひリサといふは此従なり

後素とはツカリともクサリともいふ是義両様古今のこと也
こゝは後素とは皆クサリといふ也万葉集にはタサとは戒か
事くといふなり刑具よりクサリといふなりつはクサとは戒つ
東山てクといふは羽ゆくやあるん所と候くれすれ共是
物せしをクサリなといふもののあるはかしと後素の名よりて
いひし候くを
あるへき

已上漁猟具

後より[illegible]は大日の[illegible]へ[illegible]
四の[illegible]も[illegible][illegible]の[illegible]
[illegible]より[illegible]講[illegible]文選[illegible]
也[illegible]古画
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

東雅巻之十

器用第十

書 フミ 文の字読むも又同し日本紀には文云

二字ハ合てもふみと読みつふみとは文の字

の音の轉せし也字ノ字読むなといふ漢音には

字または布といひしもありけり或人モシと

読むは文字二字の音を用ひし也誤れり

去ハ上世にいはゆる神代の字ありしとみれ
其亦いふ代のものさへありけるとはの代を知る人の
書なとハなかりしに是ニ至て始て漢字を傳ふ
始ハ然しも字皆廣かりし天武天皇の御世

書

境部連石積等勅を奉りて造れる所の
新字一部四十四巻を撰進せしかと遂に行はれす
定なれにやその廣く行はれし跡も亦あらさりける

なし世に不得漢字傳はりし事は神功皇
后の御世よりはじまりて　釈日本紀には見えし不有
姓氏録よりに仲哀の
此代不得漢字といふものたすかる秦氏録せし
御事は其書所のよし神功皇后摂政の御時よりきたるに
はあらにそれをしてありしこと
あらんつれ　應神天皇の御世百済の
使臣阿直岐来朝すよし英道太子に経典を
授けさせまゐらせ其の薦申せしによりて
彼国の博士王仁を徴しめして経籍を学ひ

あめのした文字は我国文字の始めにてまた

百済より博士を貢するの始なり阿直岐と

阿直岐史の祖王仁は書首等の祖なり

此等古事記には和邇吉師とあり王仁をば和迩吉師

とも書き王仁をワニとよみしはワニとみゆるは訛

なりし

畫の事は我の畫上の頃よりみえしは古に

證なし設楽の是の事よりこそ推古天皇の御世高麗

貢一の僧曇徴能作彩色及紙墨とみえしは

まつこの法を傳へし始なるべし

倭名類聚鈔にもみえし所にも名有りけり

璽

シルシ 昔天照大神皇孫瓊々杵尊に天降し
ます時に八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種
宝物を為天下宝とて日本紀これよりも出
古語拾遺にも八咫鏡及草薙劔二種神宝
永為天璽といへり或は三種といひ或は二種と
いふ説のとくこれを明に弁すはいとむつかし
しかれども今は神璽と鏡劔といふなりと

義為にも金ハ信之起言 沖明之徴信と釈
ありけれ 金は信をしるしとす又流と異なりけれ
と信ふ金を以印とし以益ふ信をしるしとす
いふものに古ハ壹用しまれ金印の字等あり
信をしるしとい又六部信をしるし也古代
此は朱書の印を用て本書内不違アらで
これぬれ押して信と考へらし候
信ある印
本印を是いふ

又奉幣を手放しといふも古めかし起りしといふ之物は
國四天王寺に上宮太子の御印しといふもの、あるときその
あやうきものと　まかつ中　玉篇にの璽と称
往なりき
し　群下の印といふを始めしこれにはまだ詳なれ
古の諸官　諸郡　國の印を今に華に載せしれ
國史　令格等に詳に見えたり　後作の社に璽の
その外　社の宝璽　珍蔵めし給へといふ　社といふものゝ中は
牛王といふもの　多形の文あり　古の家の跡の
にてありけり　牛王といふも　璽の字をいうて　牛玉と
集の字と　ワりちて　いふといふこ　古の諸書

あるべし　其拾遺漢土九柳字しるす
事なり
このこゝに草名なといふすなとぞ有す
俗にこれ紙別といふこれ紙
と記すとなり　紙しけへきてに意のまゝ紙は書さし

紙

かミ　前に洋紙墨の紙墨等造り法は高麗
より傳へしかりしなり　推古天皇十二年の記に
國貢上僧曇　徴能作紙墨とみえこれくはしく
紙をかミといふは書しかミことゝいふも紙すゝみ出し書く

穀樹一名楮 俗にカウゾといふ 古の此樹皮をもて神衣
織るにはカウゾと栲衣といふ 紙の料として紙といふ
すなはち此樹皮をもて作れり されバ樹名に白
カミといふ名起りしと考へられよ 紙といふものゝ始ハ古の
竹簡より代へし事とも見えされとも カミといふ事ハ
簡の字の音の轉せしもの也と考へられ

墨

墨ハ既に釋旧事紀に倭国荒田の墨坂の神
武天皇此国に入り給ひし時に荒田の八十梟帥軍
陣をはりて燒炭を置し所より其名起と
見えたり 其後に至りて墨の始を炭焼て

燼とみしきれとも墨とのみいふもあ
此も誤書にて墨を入るといふも炭を入る
といふ字にあやまりしを見えつれと日本紀に
墨坂の事誤書されしとそ旧事紀の文に
こゝろみて焼炭の字をは改め炭火とせし
されは訛てすコミヒといへるは古の所見を
炭をはすコミヒといひしを後に墨といふもの

むかし米に焼ひて炭を呼すみと墨しつく
りぬるをハかのすみしと云ひ侍へる地名
スミサカといひてあれは墨坂の字用ひ侍り
しかりしときゝ、あまた紙墨にして紙墨造
ぬるは高麗の法を傳へしとみえられたと名
のこと紀にもみえ、彼土の方言や出むも踰糜
とは漢代の墨の名とみえたり　或人の説に
墨はスミと

いふ條に云所の炸といふ之墨をすこしいふは煙之とい
ふいはもあるへし旧事紀に炭の事みえて炭焼給し
地を墨拾ひ書されしよりしもは墨をすこといひ炭を
すことといふ炭作あるへきよしもあれ炭をすこといふは煙の事
なるへしといへともこれはまいにあれてよりはれ上古の時炭
をいすことといひしはまたすこといふは墨といふもの出
来ての後炭の筆墨の墨に用ひきたれる
ならへし まして此等の類もしさるもの之徴とすに
足れるすなはちむを論て後造るもあるへけれは又旧事
紀に何逼突智の名火に焼炭ともみえしかは上古に
炭をすこといふてあるへきにいふはこれのみにあれと古事
記には火に焼炭と書きり世に行はれて旧事紀にみえ
したるは佛家のすゑに
語れりと見えたれ

筆フミテ倭名鈔に筆読てフミテといふとあり
フミハ書にしてテは手之成和幣をニキテといふ如
く撫りて書する故いふなる
即今フテといふも
其の意なるへし
又漢語抄を引て䈁筆はハケ法言切韻に髪
以漆塗物といふと見えてきりハケといふ義なり

硯

スヽリ倭名鈔硯読てスヽリといふとあり
即今スヽリといふも其の
意なるへし
水滴器読てスヽリカメと

いはゞ水瓶といふかことし

簡

フミタ借名かふ簡札二字並読てフミタといひ

簡 下注写書記事者之札ハ簡也といへるを以見て

須をフミとは書しるし 板也 即か札はフミといふ 須の急なるにフミイタ

と呼ふものゝ意にしてフミタといひし 須のフミタとかりて

板なは亦フミタといふへきよしなる 園 家をワラフタと

いひ殿をアレタといふもの也ともいふ 板の涸まても半分なりす

板のことなりたるにいひしなるへし

書案

書案 読てフミツクエといひ書 機 読てフミといふといふ

葉櫃等の秋はあふみえたり発語て一ハ二也
以為俊名称に唐韻として贋書箱之といひ
又風花をとして状ゐ冠箱而早と定たり後俗
発語て此と以為贋書の説によりとて
よりまた俊また贋書の事ぬかるとも守え
風さゝ山伏まてハ改師の偽書の行事の果然
以為すみそもりより即ち発といふとのとりん

我よ出みハ漢の薛遊秦といふ人の名なり
むかし秦の暴政を遁しはのまによりけるは
其後ハ秦韓人此宗にありしにもおもへりけれ
遊秦のよハ来人に被の京に入ぬれハ氏にしてと
いふ者に属するものともむかしハヤロウといひき藥とれ
字は用田酒の蓋の割ヤロウノ名といふあつハ此の割に
つかひしと帰りさくのをしへをうきとみの遊秦の割を換す
かし藥花の割にいてしきとの御をありける
已上文具

勇ホコ倭名訓ゝ揚子方言云として戟或謂之干或
謂之戈並ニ読てホコとよし亦鋒名として
平戟曰勇人不能之字亦作棒読てホコとよみ
読しより几勇戟しれもこ義を制の同しかりぬ
ありて千名も亦異なりし不能の今ニ勇義の字み
合しも勇者二丈前之矟者又二丈有之と義解
みえ治しは古事日本紀等の和語に従て

ホユヒはいひけり 此代より始て是を年號として
みかとの名字一つらね孫息初陽三十天璣
事をもて国土成生成しけむしとぞいひて
我国の其籍に見えけるを記さるゝもありけるを割の
始まりしよりまことホユヒといひし義を詳かにけれ
四方を統べ天璣平方の古事記には天璣尊と書けり
日本紀には四方紀にはありて書されしを璣北回帰と訳せられ
なり私紀に或本より始字為式也 蓋古者御王或為
始或為或颁草之也ひとひとひけは攫弟絶て 又ホユヒと

いふなり　鏡へられたるかは世の人語てトホコといふを
つたへらるゝかゆへこれハ瓊矛は即兒物語ニ語て廣
保存といふなれはあやうき古事記のことは
附す語をきれしてもれ改めて編次をなせし
事千謂あつたれ是也のまゝ或人の語にホコとは
火くしりていひしなくての字語てホロフといへるまゝ志からし
丸物をとすゝめ大まりも猶さるものはあられまた形も火
の穂の象にてもいふへきものといふされといまゝゝを謝せ
ますへきなれは
たてあれ　そのくち大己貴少彦名
足国と名つけられまゝに国まうれし　言天と天孫
又まいられしかはまゝへて孫に授まゝし勅

遠けれハ天の目一箇命も日向國縣の
青鷺嶽ニ現坐す神功皇后ともまし於
天の矛をとそ新羅王の門に樹てたまひて後葉
しるしとなされしともみえたり日本武尊の鵰
あらし天すめの得之まつハ凡物の鏑及あるをは
鉄といひ錐といひ釘といふの類をも鍛
きといひける　あるといふ鍛語てきルといふ亦以袋
よよれり鑄といひみといひ鉚といふのれハもみあつを
いふと軒語てきルといふ此ばかりよろしかるへ

例へハ剣をツムきともツくきともツルきともいひしを
其鋒刃なりとて実ハ凡て斬るへきをいひしなるを
万葉集にハ剣の字を読てタチともいひたり古来
ツルキタチともタチツルきともいひしものを旧説ニ
常の太刀刀といへるハ片刃にて両刃なるハなけれハツルキタチ
とハいふましきにて刃とはきこゆるしかへなりと
いへり万葉集に刃を読てヤイハといへるハヤイとハ焼也

燒刀也燒鍛をいふなり小燒とも淡すはいふそ
小さは蓋の物成此川義ふとおもひ

大刀タチ

刀カタナ倭名抄ニ四聲字苑を引て似劔而一刃

曰カタナ大刀讀くタチといふ小刀讀くカタナといふ

讀しなれ前に記せしものゝごとく古きものにも草

薙劔とも都牟刈之太刀と書きしくタチといふ

は斷して長くあらぬ斷つといふ義紫集に
太刀の字借て多チといひ倭名抄小刀
まづ文武天皇の御世に儀刀を許されて
其し而にも此ゝ良本の八寄笠といへるなり
又今にいふ諸侍を武士といへるを見ても解
平鉾三股鉾などいふことありて捻亦
後て古事といふ今義解に本両刃鈹者即謂

属也と見えたり天智天皇の中大兄と申まいら
せし時入鹿臣を誅のひしにみつから長槍を
持ありしと見えたれ大鋒双ありしめとおもつき
さてこそ後は花槍鎌槍鎗鈴尾槍などいふものことき
本の柄ほそきものとれとも見えたれは代々及ひて
やりといふもの也
長槍の制によりて名付てやりと
いひしを略しとらへたり
鉞 以下は旧事古事日本紀等に始て其説詳十

極劔のすかたにて太刀劔のことしもしるされたれ
ことに姫もこ御祥又つるきといふ事もこ御祥古事記
小烏草薙劔の事と志るして都牟刈と大刀と
いひ多くはツムキといひツルキといふは太刀の形しなり
也應神天皇の御歌にもツキノサヤと詠をたまひし
されば日本紀に劔鋒こと注しるされ又古流に
見えといひツイといふ事も相してつひならび越お國數

賀那を古にハ角鹿國といひしときこえ又角を

ツノといひしも実語てカタナといへる人あれと上

古の時には刀をはヒといひ亦は子もいひ小刀をはサヒと

いひしサは小さしとは刀也（刀をヒといふは氷本の假字）足云なり

古事記には天孫海神の宮より還るひもは佩るひ

も小刀を解きて送りまつりき　和迩の頸にかけて

返さしめき和迩還入りておそれて佐比持神といふと

見えしに此也又日本紀に素戔鳥尊八岐大蛇を
斬たまひし剣を蛇韓鋤之剣といふ又麁正紀に
称飯奈授剣入納化為鋤鍬沐と見へし鋤は字義
又読てサヒといふなるハ是小刀をいひし也又匕し
てハ太刀をもサヒといひたり推古天皇紀御歌に大刀
ならはクレのマサヒと読たまひしとクレのマサヒとは
呉国剣之名也と日本紀釈に記せられたり

これや後に傳へカタナといひしすなはち一文義
し家、其の俗名也。然変るをはモロといひし縁の
字を見ひ甚なりとはカタナといひし行の字を
見もよし。又行なりとはさまくをお挟して
いはゞ刀鋤斧鏊鍬などいひつゞきてこれ之
これも佩く下の物ならぬ傳へハカとしもいひつ
日本紀に神刀の字殊くにハカシといひし是之

倭名は類聚鈔とりて欄に劔柄の注にタナ十
ツカといふ鐔は劔鼻之注にツミハといふ鞘は
刀室之注にサヤといふと注せり日本紀に劔柄此
字注にタカヒといふ或は神世の昔に劔柄を
タカヒといふ日向風土記には高日村は昔
天より降臨神劔柄をもて此地に置給ひしより
因て劔柄村といひしを後人改めて高日村と

いふへくしけれ世にもてはやされし銅柄也
タカヒといひし義なりされハ不祥古事紀に
亦帝大久米命等横刀之手上を握りて宇陀
ぬりし宇迦斯を罵詈しといふ事ありしよりタ
カとも又ハ是手上之 タカヒといひタカミといふ 是柄也 考工
記曰叡莖人不抵譚以上也といふ事見へぬ
譚をいへハといふ義不祥條名海ニ参録具下

鑷子とツミといふものは其傳にツムといふ名ありて
其物の形あるをもて傳にツムとはいふ也刀劔の鐔も
剡めくる此物の似たるをツミとはいひしく
ヌカヒといひヌカミともいふ
これ按ずるに
考工記云劔莖人不撓鐔以也
といふより合めく鐔をツミハしていふ義か譯
儀式御齋祭具に鑷子ツミといふものなり
傳にツムといふ名ありてこれも其物の形あるをもて

俗にツムハといふも刀劔の鐔に割のよくしきなく
俗にヘラクテもツミハといひし也 これ今俗に細太刀の鐔をフントウなと
いふなれ 鞘 俗にサヤといふもサヤは小也やは室
也 これ刀室の義なる也 古訓にサハともいひしは
弦の義なる也 古俗にはサイヤといひしをも訛なく またサヤといひしも亦是なりと
サヒといひしよ ホタモ鐔なり もし 俗名鍔又鐔 鏺 俗に
ツヒトリといふもこれ佩に及ぶをいふ也 鞆韜

絵く文テノフクロといふ事紋文ヲ輪ニ錦衣之と
いへる也

弓工　我亦弓矢の媒詳なる月弥広月弓
等と申せしに弓はえたる事殿ニ古有初
まして世に見えぬ工といふ事弓詳弓師等歌
まくらかさをかくといひしゆへ古流工といひ
弓といふ事は弓漸してといひけり見之　空の詳　詳なり

されは弓をユミといひしは射の義にてまし

ユミといふもいひしかことく絃を張矢をいて

いひけることいひけむといひしかことくなるへし　あるの
弦よりユミ

といふハカカミとこそ耶のユカミぬるよりいふとユカミとは

弓上にユトムるといふ詞をあまりてこれいひし物なれ

万葉集には弓上此字をユスヘとよまし

読めり

ミトラシといひしは所執之男子ハ執ヲ不ル物歟

ありといふ也方祭祭符又ミトラシは所弓之ミタラシ

といふは栲縄といふ足也 古く蜀の概の不しれ 宗本大臣記に云人の
人民の姓を洞(ほら)と科せられし蜀の祖洞と名流まし
これをかくして古の俗とさるべきく
倭名鈔に釈名をひきて末曰蒲ニハスといふ中央曰
荷ニツカといふと見えしは俗にハスといひニツカといふ
その頃古事記には蓮端の字を用ひて績にニコ
ハスといひて万葉集には又ハスといひハシといふ
同語の如く語にハスをはなれて小気としこの

し井也かし此ハスをは中をと云けてうしろ人のかしこに
くる也ハスは中よりにうねる也を中ハスといふて
又てうきる也とるも先もハスといふなり絃を合む
所なれとも其後蒲なりける人七弦のかきりとは
多かれ来といふことしよの撥不ありといふ絃名
按又絃緒五ニツ琴といふ万葉集和琴ハツマと読
倭又ツ琴といふ又良琵琶といへ琴とは鈎連之義にしてみな是

本来とえらく（こゝといふ）的の字は是ゟ引出す といふて見えたる或人の説
に愛を清うく弦の名あると見たし 然らすんはとしさゝえ
矢を射るといふも愛を清くゝやいひぬる此元字義
まは座るに実なるものゝ事もあるへく
用しまに似て見ゆる事ありけれは（ここまて）また儀名如文ぬる
弦くニホエ元といふて弦なり

箭 やは弦也弓亦同し 日本紀新紀には矢以字材
遣し当也とみて それやとは破之を魔を破るとす
つくへしみを破ニ 鉄厭なとしてものゝかわつも亦此依

今も俗に破るゝをやれるといひ彼もしるゝと
うれゝ　ヤレといふをやれといひしといふことは它詞也やと
いはるれ破るゝ従えまきヤクルヤフレをいふかことは天猫之矢
の射るゝ義也たとへば毒気を威し猫出しとカフレみといふ
数猫のなかることし

俗名猫を渡して親名とす
笑ゝ孫曰蕣ヤカラ音同粗小を足曰猫或狸之類也
サキ俗にはヤミりしいふ猫を為ゝ不鋭者狸之
平題はイタツキ唐韻に鏃は箭足鈍者也以
はヤハズとよべり　鋒鏃をヤジリといふは矢字の音の
略也といふとサキといふ谷氏ときハ

下の弦を見てヽヽイクツキといふ其下弭ハズにて弦を見る
さし〳〵儀名所に鏑鏃并に弦々ヤサキといふ其後にて見て鳴鏑
とカフラといふ其儀は見て鳴鏑也
下の蟇目の弦を見る

靫ユキ儀名所に靫名は附くる人不帯回靫以箭

又其中也弦にユキといふ字は延喜日非千箭五百
箭之靫と箭を入れて見えたり然ば盛矢器と名
流行にユキといふなり古より此後ものとし
靏ゟ延日本紀を見て〳〵其箭五百箭
の字古事記にも入五百入と作なり　古流ヲ見物と

箭室をいひくりといふ亦轉して ハキといひけり
ゐのケといひしも箭の字を借用ひたるき ユキとは弓
張箭麻箭なりとせしこともみえ
箭之名附具といふなりと倭名抄又周礼注にも
又箙を云箭室之ヤナクヒと讀む唐令胡禄二
字と同也と注せりヤナクヒとは矢を箭之古語
イといふ詞ゆゑをナといひしよりのちのとりとさは
きといふ語をもつてのちの後之後世俗より箙

此字を読てエヒラといひ筁簿なとの字をも

用ひたりエヒラといふ字義不詳備名称なは

蚕桑具に蚕簿の字を載せ集苑をひき

簿一名筁曲蚕簇施於其上冷作尓中者也

読てエヒラといひて浅しきり彼是を混と按

するに古の時農具をエキといひ中比までは

ヤナクヒといひしとそ是又蚕簿此割のことく

服りあしてしけりとユヒラとあつ由しくゐこゑ
さよし　是矢の家吉茶の制亦多し侍まりゝウワホし
いつとみありて東溜ゐは羽量しあらしくゆ
ゝあるのれ吉とすへさりゆとは
秋ちうまいおもれ

皷

トモ　俗名将ま蒋簳切鼓を同く皷と在礔遙
是也　謂くトモとは楊氏漢語抄日本紀等ニ鞆
字を用也　本文未詳と涌しまう鞆字嫁くゆる
紀ニ見えて古事記日本紀等ニ見えし不宗同しトモ

或説にカラといふ名目は比上古御作字籍御衰
武多くなりたる籍字説くホムタといふを證せんれ
ものなりてホムタといふカラともいふ一称にて二名
あるべき義無く又籍字を此に致す故に依割
造らるゝ所となりし也 此にして彼等をも造割たる也となる字
草に似ひ或は形ひとは梅の字につくり
カラといふ字は微ひく此字割め造りて亦説くカラといふ字似たる
れとも此ともいへるか詳ならぬもしや此とよりおもへらるゝをも
依名此又 射講の字は都也説文をおもへ講と

射弭端也 注云ヌニキト云ハ一ツ又小キト云トハ
セシハ鷹ヲ射テ鏡遠目當也見ヘシメヌト
一物ニシテ射ル時モトモ要ヲ總スル也依テ
小キト云ニ此之儀名ヲ付テ矢之名ヲ號注ニ別ク牒
凡揉之注云ユミカケト云ヲ須ヤハ儀ヲ可疑之也
然シテユカケト云ヲ以テ此之口傳名付テ的注テ
一ト云ヘ日本記ニハ 的注云イクハト云ヒケル也

並不詳万葉集り圖乃字注てトカタと
いひしを按るに阿はニトとはを瓦の象なるよ
見てなつ草といひし也倭名抄にも楊氏漢語
抄を引て射楽注てイクハトコロといふ世間にアム
ツチといふ今按又用棚字し須ては今俗にアツ
チといふもの訛也されとも劉のことくれは古に同し
つれ

幡

ハタ 倭名抄ニ考声切韻ヲ引テ幡ハ旌旗ノ総名ナリ

謂くハタといふハ源平の旗旌ノ制ニ起れり

而テ紀ニ伊弉冉尊ヲ紀伊国熊野有馬村ニ葬ム

土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡

旗歌舞而祭ルとあれハ国朝可頒之事さ

事也抑古ヘ皇紀天上之事須ラずして

大幡

不雅の体雅渋にも偏りぬけし華葉稀にハ多
といへハ古池なとといひしハ危き文といひしハ來之
年の巷くしてかしぬるといひもとこそ古へ年と
いひしその姓ははまさアしまといひける傳衣於小
庵號をとりて號は雅雅来人蒙之謹て八多
アモといひしみえし昂淵之

梢

冬戸日非て無尾戸よこりも寺とも付よ表捜然

神代して作稲と云ハれ神武天皇御位の日宮ミ
麻志麻治命稲を進ハれ推古て宮代竹世
に大稲作りしめてはりによりて
天皇御すなす
り本紀古御稲進
等ミえたり
古の稲ハ云苦の名のミ残りれ
儀衛にも備られ不あるなりといふへし立速
さりハ神武天皇東征の日草香津にて極稲
らえし不は稲津といひしを何を古今の日本紀等ミ

云へり即牌之倭名ハ又釈名を引て狭而長
曰歩楯歩兵所持之語てテタテと云を須用也
用明天皇紀ニ大伴毗羅夫手にて弓箭皮楯を
執りしとみえしハ此即ちかはたて見えたり
甲ヨロヒ 倭名ハ又釈名を引て甲者似物之者
鎧甲也俗てヨロヒと云を須用古語には甲をよ
カハラといひけり日本紀天武天皇十年武埴

安衣ハ兵官軍にをされ破られ脱甲而逃る人
號其跡甲處曰伽和羅といふ古事記に意外
甲
天皇の皇子大山守命宇遲を殺さむとして
河を渡るに及びて水中に墮りしきひしは
鉤をもて探るに其衣の中の甲に鉤かゝりしかは
かわらと鳴りて河和羅前といふ名つきし
號（淵之）とありカワラといひしことはもとの鎧甲あるの

義ては合へるなと條して龜の甲をカメノカハラ

みといふ宗はしく武内宿祢なる良将といふはかぞへよめりこことはす

ヨロヒとあるをいひしよりいつまでの比ほひより婚姻

らむ日本紀に據る字讀の字法てヨロヒといへるは

古語の方言にも似てけるなし倭名鈔に

説文を引て冑鎧てカストといひ首鎧也堂

得しれり此句古くありては いふやいひけむ

カストといふはこれかぶとの韓國の方言に出
る也
古の時韓地の語にカフトといひしこれはかぶとこれ
甲冑の二字をこそ方言に合せて呼ひしなるへし
即今も朝鮮の言に甲を呼ひてカストといふと又
ヨロヒといふはすなはちこれ鎧の語に出たるなるへ
ヨワヒといふ語の物おしなへし 神武天皇の御時

文武の官として武器をしめしぬ張て
馬并高倉永佐装束と馬の鞍具修覚せしとみえて
装束の字読てヨソヒともヨソヒとは文武軍装を
いへることなれば書の標をも識しつべく
より史記を遣日本天聴にたてまつり御覧せし
明年罷通帆瀬書を作箋し義捜剣の書を
作りとすることのみならず文鏡録日記るといふに

降らしめ給ふも笠縫等 祖王依麻良曾々
笠縫等人祖王依来麿等をして役らしめ
られ給ひしにて御字紀にも見えたるの事なり
此事の後のことく見えたるの笠をいたゞくの
雨を禦くためにはあらて漢の禮笠をいたゞくの
のすゝみかりしを考へつれは冑の制にも笠の
以下のより半紀見るかは姫代よ及ひく冑の如し

越笠嶮なとにて遠舌ありしともきこえぬへからん
倭名抄拙鍬ら銅斧の異名にみえて新しつへき
すからはさらに採なり洋なりてはさらに韓採
そのかの書にもみえされと本朝軍器考にもみえぬ
その大要をのみ挙け然

已上武器

ゆふ上かね 詞

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]


H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002